

J O F I 東京通信

第7号 2019(平成31)年1月11日発行
<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

新たな取り組み.....	1
会長 鈴木 伸一	
ゴミ拾いが楽しい人生.....	2
阿部 敏明	
エンドレスフライフィッシング.....	3
川原 隆	
ヤマメ発眼卵 BOX 埋設、回収とヤマメ稚魚放流活動 事業について.....	4
新井 勝之	
アルプスの現状.....	5
粕谷 正光	
ワールドフライフィッシングチャンピオンシップ 2018 イタリア大会に参加して.....	6
鈴木 等	
夢のメーターオーバー.....	9
小松澤 誠一	
漁業法改正に思う 釣り人の覚悟の問題.....	11
石井 利明	
「釣りの潮目」その3.....	12
四条 徳明	
2018 年度活動実績.....	13
編集後記.....	14

新たな取り組み

会長 鈴木 伸一

インターネット技術の活用が進むと共に、全世界から様々な情報を即座に入手することが出来るようになり、人々の生活様式も大きく変わってきました。そのせいか、釣りに限らず、特定の団体に所属して活動する方も少なくなってきました。

バブルが弾け、釣りインストラクター制度が立ち上がった当初は、毎年多くの方が資格取得のため受験され

ていたようです。ところが、この頃は受験される方も大幅に減り、当釣りインストラクター連絡機構においても高齢化が進む一方です。(一社)全日本釣り団体協議会(全釣り協)では様々なメディアを通して、釣りインストラクター応募を呼びかけていますが、ここ数年、全釣り協のホームページを介しての応募が増えおり、今年度はついにネットを介しての応募がトップを占めました。

かつては「釣りはフナに始まってフナに終わる」という格言もありました。ところが、近頃では釣り場環境の悪化からか？ 特に都市部においては必ずしも身近で(手軽に)釣りを始められるとは限りらないのが現状です。また、最近のような殺伐とした世の中にあっては、釣り教室でも行わない限り、見ず知らずの子供さんに釣りを教えるようなことも困難になってきました。

さらに、釣りのタックルや技術も日々進化しており、初心者が一言に釣りと言っても、その目的とした釣りのジャンルは多岐にわたるようになりました。釣りインストラクターと言えど、過去のことばかりに囚われず、時代に即した対応をしていく必要があるようです。

今年度、海面では若洲海浜公園におけるクリーンナップ作戦が定着し、TOKYO MX テレビでも取り上げられ、着々と成果を挙げてきました。これは、毎月第二土曜日の午前中に海浜清掃を行い、午後から希望された参加者に釣りを教えるというものです。清掃の際にはマイクロプラスチックや放置された釣り糸などが引き起こす環境問題、安全かつ法令に則った釣りの説明なども行っています。



また、釣りの指導に際しては、一般の釣り教室とは異なり、相手の希望に即した釣りの指導が可能のため、

参加者からの満足度は高いように聞いています。

一方、内水面におきましても、9月に入り、某イベント会社からの「キッズお仕事体験」への参加依頼を受け、子供さんや、その親御さんに対し釣りインストラクターの紹介の試みを行いました。その結果、思っていた以上の好評を得て、その後も計7回参加しました。

会場の制約、対象が小学生以下と言うこともあり、主に疑似釣り体験ではありますが、釣りに興味を持っていただけるように、そのお子さんの年齢に合わせるようにして釣り上げた魚の説明などを行っています。また、親御さんには釣りインストラクター制度の説明やそのときどきの会場のテーマに合わせ、例えば太平洋クロマグロの資源回復に関した話、外来生物法などに関する話題なども提供しています。



何れも、通常の釣り教室のように釣りインストラクターの大量動員の必要はなく、若返りを図っている過渡期にあつての当釣りインストラクター連絡機構では効果的な活動と考えています。今後も、皆様のアイデアを基に、決して背伸びをするのではなく、我々の現況のパワーに即した効果的な事業を展開していきたいと考えています。ご協力よろしくお願いします。

ゴミ拾いが楽しい人生

阿部 敏明

河川でのゴミは生活に関連した物が多数である。調理器具や食器類、寝具類、電気製品、調味料、バイク、自転車。ホームレスの転居、家庭で不要になったので持ち込んで処分されたと推測される。

解決策としては処分場の設置、定期的に巡回清掃やイベントを実施する。

若洲海浜公園は年に何度かゴミ回収を単独で行っているが場所によってゴミの種類が大きく異なる。

岩場は流れてきたいろんなゴミが岩と岩の間に入

てたまっている。家庭用品や船の用品、タイヤ、木材、釣り具もある。竿やリール、根がかりで切られた道糸、うき、コマセ籠、ルアー用品。

防止不可。



堤防は釣り具が主体。特に針、オモリなどの入っていたナイロン袋。問題になっているプラゴミである。

風に飛ばされ、海に流れて沈めば魚が食べ、海面に浮くと鳥が食べ、子孫が絶滅の危機に。それらを食べ続けると大型の魚や亀も同じ結末になると考えられる。

持ち帰る事のみ。



柵の設置されている釣り場はベンチがある為か食料品の入っていた空き容器や空のペットボトル、空き缶、空き瓶、煙草の吸殻。

沖を走る伊豆諸島の船長は波間を漂うたかがフィルターが良く目立つそうです。

ゴミの問題は今後世界中で大きくなっていきます。ゴミ収集場に捨てましょう。

最後に私は回収した釣り道具を整理して保管しています。将来それを使って美味しい魚を釣りたいと思っているからです。



エンドレスフライフィッシング

川原 隆

1951 年生まれ 67 歳。フライ歴 45 年。その他にルアー・へらぶな・黒鯛の落とし込み釣り・船釣りなどほとんどの釣りをしてきました。

当時はまだフライフィッシングが盛んではなかったので独自で研究し、バイスも持っていなかったので手で巻き、毛鉤とフェンウックのグラスロッドを持って芦ノ湖や湯川などの川に行くようになり、かなりの釣果があった事を覚えています。

当時の湯川はブルックのサイズも 25~30cm は優にあり 20~30 匹位の釣果があり面白い釣りができましたけど、他の川、例えば大洞川や秋山郷など源流の釣りは当時放流が無く厳しい釣りだった事を記憶しています。

後に忍野にジムグリーンがキャスティング講習会に来たので参加したり、サワダさんにキャスティングを教わったりしながら関東・東北などの川を転々と釣り歩きました。

後にアラスカのサーモン釣りのコーチを頼まれ 2 年間やってきましたけど日本の素晴らしい川で岩魚・山女などをフライで釣ったり、湖で虹鱒・ブラウン・岩魚を相手に楽しむようになり、その後スイスに仕事で住み、10 年

間は時間がある限りフライフィッシングをし、いろいろな釣り方を学びました。

その時に石村さんからメールが届き「ワールドフライフィッシングチャンピオンシップに参加してもらいませんか？」と言われたのでポルトガル戦をきっかけに以後大会に出るようになりました。



大会がヨーロッパの時はスイスから行ったので飛行機代は 4 万円位で行けたので金銭面・時差・体力的には楽でしたけど、日本から行くのはかなり大変だと感じるこの頃です。

ですけれど、他の国の選手の毛鉤やテクニックなど日本では学べない事が、出るたびに参考になり、フライに対する自分自身の釣り方が変わっていくので、これほど奥深い釣りはないような気がし、これがフライフィッシングの楽しみだと思っています。



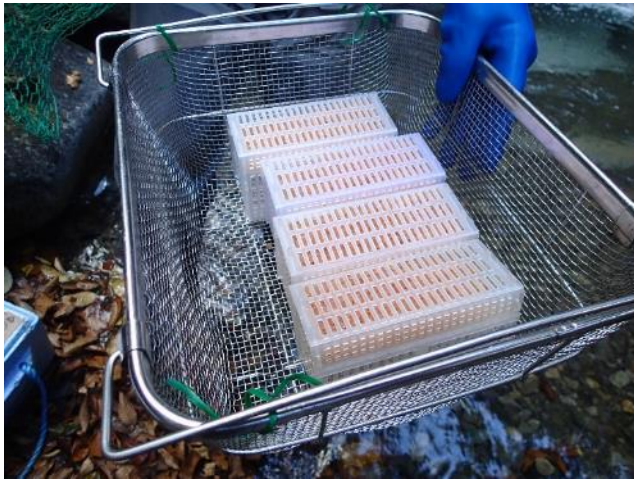
これから何年大会出られるか解りませんが、釣りは一生の友で生きる活力であり続けていきます。

釣り好きの皆さんも研究しながら楽しんで下さい。

ヤマメ発眼卵 BOX 埋設、回収とヤマメ稚魚放流活動事業について

新井 勝之

毎年行われている JOFI 西東京に協力参加している活動事業ですが、11 月初旬に奥多摩の水産試験場からヤマメの発眼卵 1 万粒をもらい、目的地の奥多摩湖に流入している〇〇沢へ行き、ウェダーや手袋等に消毒液かけ殺菌してから川の放流ポイントに向かいます。



埋設場所は渇水期でも影響を受けにくく、流れの余り早くないところを数箇所決め、バイバードボックス(発眼卵容器で誕生した稚魚が出られる様に隙間が空いている)に発眼卵を移し、金網の籠に入れ、金網の蓋をしてから埋設ポイントに置き、流されないように周り、紫外線よけに上にも石を置きます。

籠にロープを付けて地上の石に括り、流され防止と位置の特定の為に近くの本などに放流場所であることを注意喚起するポスターを設置するまでが 1 カ所ごとの工程です、これを 4 カ所位に行い、無事に生まれる事を祈り、埋設作業の完了です。



回収作業は 3 月後半か 4 月初めに行います。



まず奥多摩漁協からヤマメの稚魚 5 千匹位を譲り受け、11 月の発眼卵埋設場所に行き、初めにバイバードボックスの回収作業を行い、中に稚魚が残っているかの確認をしますが、ほとんどが残っておらず空の状態が多いです。中には稚魚が残っていたり、カニ等が入りこんでいる事もあります。



回収時の状況を記録し、その後、稚魚の放流作業に移ります。

沢の水温にならず為に浅瀬で流れの緩い場所を選び徐々に放流します。これを数カ所に分けて行います。



以上が、ヤマメ産卵BOX埋設と回収作業と稚魚放流の活動事業ですが、私の記憶では10年前後行われていると思います。

毎年継続することで少しでも魚が増えて釣り人を楽しませてくれる事と、自然に魚が増える事で環境的にも良くなる事を望んでいます。

しかしながら、参加するJOFI西東京のメンバーや応援の東京メンバーにしても高齢化が目立ち、この先何年続くか不安を隠せません。

今回、会報に投函したのも釣りインストラクターの活動事業としては出来る限り継続すべきだと思い、現会員及び新規加入された人たちも積極的に参加してほしいです！

アルプスの現状

粕谷 正光

今年もフライフィッシング世界大会に参加してきました。少しでもフィールド情報を得ようとして一週間前から主催国のイタリアに乗り込み、ベネチアからトレンティーノに車で向かい、試合会場に隣接したカデルツオーネで自主トレを行いました。

意気揚々と向かった先に見えたのは真っ白に濁った溪流です。派手なフライでも5cm程度も沈めれば確認が出来ない。そう、米のとぎ汁を流したような流れです。

この時は、昨日までの雨の影響だと思い、大会までに濁りがとれればと願って釣りを開始しますが、水深もポイントも分かりません。ましてや魚影が確認出来るはずもなく。経験上、こんな濁りが入った時は流れの緩い岸際に居るに違いないと、探し出しては見ましたが、試合までの5日間でこの濁りが消えることを願うだけで、釣りにはなりません。



そんな中で現地のガイドから耳にしたのは信じ難い現実でした。

実は降雨などと単純な話では無く、もっと深刻な話で、

地球温暖化がアルプスの氷河を溶かし、その中の白砂が濁りの原因だとか。つまり、フィッシング・シーズン中はズーッとこの状態が続き、冬になり水源地が凍りつき、氷河からの流れが止まった時に、従来のクリアーに戻るとの事です。こうなるとどちらが正常なのか分かりませんね。

この話は他国の選手と久々の再開を祝う晩餐の中で聞かされました。しかも、そんな事は選手の誰もが知っている事だとの事。その瞬間、腹が立つやら、悔しいやら。

漸く、気持ちを落ち着かせ、この現状で戦うしか無いのなら溪相を読んで、流すしか無いのですね。

おそらくこの濁りの中での特殊性はあるのですが、大きな石の前後や落ち込みを狙い、流れの中にフライを止めて置くのも必要かも知れません。何しろ視界が効かないのですから。

前に得ていた、日本の溪流に似ているとの情報は脆くも崩れ去りました。仮に情報が正しく伝えられていたとしても、どの様な訓練が出来たのでしょうか。

日本では最近の気象災害の異常性から、地球温暖化の影響か？と騒がれ出していますが、未だに、実感として捉えられずにいます。少なくとも私はそうでした。

ヨーロッパではその現実が疑いの余地無く、目の前の光景として日常的に捉えられていたのですね。

溪流の状況だけで考えれば、おそらく、氷河が溶けきる100年後にはクリアー・ウオーターが戻ってくるのですが、その時、ブラウン・トラウトは、マーブルトラウトは、人間は、どうしているのでしょうか？

この後の練習でも目にした光景を報告致します。

二日目は、前日の教訓から、川を変えて上流に向かうが、辿り着いた現場は更に濁りが強く、流れも早い、増水した河川の様相です。



上流に行けば行くほど氷河溶解の影響が出てくる。上流、若くは支流に入れば水が澄んでくる日本での常

識とは全く逆です。下流に行く方が澄んでいるのです。ダムが浄化槽の役目を果たして、この状況を作り出している様です。

ここでの釣りは諦め、折角買ったこの入漁券を放棄して下流に向かい、入漁券を買い直す事にしました。ようやく辿り着いたフライショップは閉まっています。休日ですか？
 ハハハ、そうです。昼寝時間です。どの店も閉められて昼寝の時間です。
 シエスタ？
 pm1 時～4 時が目安ですって。

仕方が無いから、近くの日本食レストランに入り込み、焼きそばとチャーハン、そしてビール。
 日本食レストランは日本の習慣で営業していると思いきや、食べ終えた瞬間に店は閉められ、怪しげな日本語で「ありがと ございます。さよなら！」ですって。
 ここも、やっぱり昼寝時間です。
 それでも、注文を取ってくれただけで良しとしなければ。

レストランを出て、別の釣り具ショップを探して問い合わせれば、開いているとの事。
 道に迷いながらもたどり着き、やっと手にしたライセンスを持って、ショップ・オーナーのお薦めポイントに向かいます。

濁りは相変わらずですが流れが緩いので立ち込む事は可能です。上流は深くなっているの、下流に向かい、股下までの深さで探りを入れます。

ここは濁りと共に梅花藻風の水草がマダラ模様で邪魔をします。

水面に覆いかぶさる灌木の際を探っていくと、漸く、リミット(20cm 以上)ギリギリのマールトラウトを手に入れました。



日が暮れて、車で走り回る 1 日でした。
 注、リミットとは大会規定で 20cm 以下はカウントされない。

三日目はダムの下流に入りました。
 濁りは有りますが、居れば魚影が確認出来る流れです。

入渓ポイントから上流に向かって探り始め、小さいけれどブラウンがチラホラとニンプを追いかける魚影として確認できますが、一度失敗すると二度と出てきません。

しまった！流れ落ちる大石の下の流れの中で大物がニンプを追ってジャンプしました。全身が見えた姿はやはりブラウンです。

そこから逃げ去った様子は無いけれど、その後は全く反応がありません。

何処か伊豆で見た下流域に似ています。溪相は似ていますが、白い濁りが薄くなっただけで相変わらず。

昼までに何本かのブラウンを釣り上げ、ピザ・ハウスで昼食のピザを食し、地球の危機を目の当たりにした今回の自主トレは複雑な思いのまま、二班に分かれて到着するチームジャパンの集合地のホテルへと向かいしました。

ワールドフライフィッシングチャンピオンシップ 2018 イタリア大会に参加して

鈴木 等

日本でご存知の方は多くはないと思うが、ワールドフライフィッシングチャンピオンシップ(WFFC)という、世界各地から 30 カ国ほどの国が参加してフライフィッシングの腕を競う大会が毎年開催されている。

開催地は毎年変わり、最近だと 2016 年はアメリカ、2017 年は東欧のスロバキア、そして 2018 年はイタリアで開催された。

参加国の中ではスペイン、フランス、チェコ、アメリカなどが強豪国で、過去数年これらの国が優勝を競っている。

実はこの大会に私の所属する釣りクラブであるワールドフライフィッシングジャパン(WFFJ)が母体となり、日本チームが参加している。

イタリア大会に参加する機会を得たので、その経験を皆さんにお伝えしたい。

開催地はイタリア北部にあるトレンティーノ州で、スイスとの国境にも近くアルプスからの豊富な水に恵まれた、川と湖の景観が素晴らしい釣り人には魅力あふれた地方である。

競技はイタリア最大の湖であるガルダ湖に注ぐサルカ川水系の川と湖で行われた。一帯は山に囲まれた峡谷域であり、川の様子は日本の溪流に似ている。

開催期間は 2018 年 9 月 17 日から 23 日の 1 週間。この間に開会式、ウェルカムディナー、公式練習、3 日間の本戦競技、環境保護イベント、表彰式、晩餐会

と盛りだくさんのスケジュールが組まれた。

開会式はトレンティーノ州の州都であるトレント市の中央広場特設ステージで開かれ、それに先立って各国チームが国旗を先頭に 1km 程のパレードを行い、広場に集まった。

沿道の市民からの歓声を浴び、イタリアでの関心の高さを実感した。



開会式では各国の選手が自国の国歌に合わせて順にステージに登壇し紹介された。

その後には、この大会には相応しい趣向とも思える自然科学博物館の中でのウェルカムディナーが催され、動物や鳥の剥製に囲まれながら美味しいイタリア料理を頂き、他国選手との交流を深めた。

ここで、簡単に競技の仕組みを説明する。

大会の参加国は 30 カ国、1 国の選手は 5 名で、総勢は 150 名である。

選手は各国から 1 名ずつの 30 名のグループ 5 つに分けられる。セクターと呼ぶ競技会場は 5 箇所設けられ、1 回 3 時間のセッションでは 1 つのグループが 1 つのセクターに割り当てられ、全選手がいずれかのセクターで釣りをする。そして、セクターをローテーションしながら 5 回のセッションを行う。

各セッションでは 20cm 以上の魚の数と大きさで与えられる得点で 30 名の中の順位を競う。

その 30 名の中での順位をプレイシング (Placing) と呼び、数字が小さいほど上位を意味する。

そのプレイシングが 1 セッションの得点になる。

個人の総合順位は 5 回のセッションのプレイシングの合計で決まり、チームの順位は 5 人の選手全員のプレイシングの合計で決まる仕組みとなる。

この仕組みでは釣果が 0 匹だと、自動的にプレイシングが最下位となる。釣果 0 匹を記録用紙が白紙であることからブランクと呼び、選手は是が非でもブランクは避けようと努力する。

1 箇所のセクター内は川の場合 150m 間隔でビートと呼ばれる 1 人用の釣り場が 30 箇所定められ、30 人の

選手が公平な抽選で割り当てられる。湖の場合は湖岸に 30m 間隔のビートが 30 箇所定められ、同様の抽選で各選手に 1 つのビートが割り当てられる。

セッションの間には魚の寸法を測定するコントローラと呼ばれる審判者が各選手に付き、釣った魚をその場で測定、記録し、リリースする。

魚保護のために釣り針はバーブレスに限られる。

今大会のセクターは 4 箇所が川で、1 箇所が湖であった。

9 月 18 日は公式練習日。

大会委員会が競技河川のサルカ川の競技セクターと異なる場所で実釣練習の機会を提供してくれた。

大会直前にイタリア入りした日本チームにとってはサルカ川の様子や魚、適した釣り方を確認できる、とても貴重な機会であった。

一方、強豪国は 1、2 週間前からイタリア入りして、川や湖の様子をすでに掴んでおり、公式練習には現れないのが常である。

午前の練習会場はサルカ川下流で、淡い白濁が入ったミルクィな流れであった。

聞くとところによると地質の関係でどの川もミルクィになっているらしい。

所々にプールもあって、いかにも釣れそうな感じであったが、30 分ほど経ってもまったく反応がない。

周りの各国の選手も苦戦しているようで、ポイントを求めて移動を始めていた。

自分も遡りながら目ぼしいポイントを探ってみたが、やはり反応がない。魚がいないはずがないと思えるプールで粘ることにして、20 種類ほどのニンフフライを流し方、深さを変えながら次々と試してみた。

この作戦が功を奏し、初めて当たりがありフッキングした。魚はさほど走ることもなく、25cm 程のブラウントラウトがネットに収まってくれた。これがイタリア、いや欧州での記念すべき初めての 1 匹となった。



ほどなくして同じフライでもう 1 匹釣れた。

午後の違う場所での練習でも同じフライを試してみると、40 センチ近いブラウンを含めた良い釣果が得られ、

このフライへの確信を深めた。

いよいよ本戦の開始。

すべてを書き綴ると長くなってしまうので、最初と最後のセッションについての話をさせていただく。

初日午前のセッションは湖だった。朝 5 時半にはバスに乗り、1 時間程で山のふもとに到着、そこからは急坂に貼りつくような未舗装道路をバスは唸りを上げて登っていき、しばらくすると森林限界を超えた。そして到着した標高 2200m の地には、氷河が削って作ったエメラルド色に輝くコルニセロ湖があった。

湖の向こうには槍ヶ岳にも似たアルプスの尖峰がそびえていて、しばらくは景色に夢中になり、写真を撮りまわった。



その後に選手としての現実に戻り、自分のビートから湖を眺めるが、どこを攻めれば良いかまったく見当がつかない。

日本国内でも初めての湖だと途方にくれる、ましてやここは海外である。後ろの崖の様子から水中もかなり急勾配になっていると推測し、ラインはシンキングのタイプ 4、ロッドは 6 番、フライはパイロットフライとして実績のあるマドラーミノーの 10 番に決めた。

8 時半の試合開始合図で、緊張の中キャストイングを始めた。

朝は近場にいることも多いので、岸際には近づかず、少し遠くから湖の近場を扇上に静かに探してみる。

しかし反応は無く、だんだん遠くに投げ、且つ直後のカウントを増やして深めを探してみた。

30 分程して 10m ほど先でフッキング、ロッドがギュッと絞り込まれる。少し走った後、引きが弱まった時に魚を引き寄せたら、ブラウントラウトが姿を現した。

コントローラも魚の測定器を持って走り寄ってくれた。ばれるなよ、ばれるなよと願いつつ、逃げようとする 30cm 程の魚体をゆっくり引き寄せた。その直後、大きな一跳ねで無情にも針は外れ、魚は湖深く姿を消し去った。

大会 1 匹目が消えたことに一瞬放心状態となったが、

少なくとも狙いに間違いは無く、釣れる魚はいることに気を取り直し、キャストイングを続けた。

1 時間程した頃と同じ深さでヒット、同じくらいのサイズだ。

今度はより丁寧に引き寄せ、首尾よくランディング、大会初の魚を釣り上げた。コントローラが手早く測ってくれて、サイズが 31.5cm のブラウントラウト。

ともかく一匹目が釣れたことと、ブランクにならずに済んだことで安心した。

その後もフライや深さを変えながら釣りを続けたが、時々近くまで追っては来るものの、あたりにはならず結局 1 匹でセッションは終了した。しかし、初セッションのこの 1 匹は自分にとって大きな収穫となった。

その後の第 2 セッションから第 4 セッションまでの 3 回のセッションでは各 5 匹の釣果があった。

決して数は多くはないが、ブランクも出さず自分としては上々の釣果であった。

練習で効果のあったニンフフライが各セッションでも役立ち、足りなくなったので夜遅くまでかけてフライを巻き足したりもした。

最後の第 5 セッションも同じくらいの結果を出せれば、目標にしていた個人順位 100 位以内の期待も持てた。

命運をかけた競技最終日。

午後の第 5 セッションはサルカ川下流の川幅の広いセクターであった。早めに到着したのでじっくりとビートの様子を観察して、攻め方を研究する時間があった。

ポイントは反対側の岸に沿って点在し、所々は深そうなプールにもなっていた。ライズも散發していて、ビート運に恵まれたと感じた。



しかし、川幅は 50m 程あり、釣れる度に長い距離をコントローラまで魚を運ぶ必要があったので、数が釣れると体力もいるビートであった。

ドライフライを使うか迷うところであったが、深そうなプールもあることからやはりニンフフライを使うことにした。

セッション開始の合図とともに下流から釣り始めた。

10 分程して 1 匹目を釣り上げた。ブラウントラウトである。急ぎ川を横切って、コントローラに魚を渡す。手早く

測ってくれて 24cm。サインをしてすぐに釣り場に戻った。

その後、自分でも予想もしなかった展開となった。

なんと 5、6 分毎に魚が釣れはじめ、中央部の深みになると大型になり 40cm 弱が度々出るようになった。

釣れる度にコントローラのところに重い魚が入ったネットを抱えながら走った。心配した通りの体力勝負にもなってきた。

近くの橋の上には観戦者もいて、ロッドがしなる度に歓声が聞こえる。

上流部に釣りあがるまでの 1 時間半程の間に 15 匹を釣り上げた。そして下流に戻り釣果の良かったところを再度丹念に探った。

さすがに最初ほどの反応はなくペースが下がったが、それでも 5 匹を追加して、合計 20 匹を釣り上げてセッションを終了した。

気になる結果は夜にホテルに貼り出された。

第 5 セッションはなんと 4 位の好成績となった。

全セッションを合わせた個人総合順位も 150 名中 61 位となり、目標の 100 位を大きく上回る望外の結果を達成できた。チームメンバーからも祝福され、満ち足りた気分の夜となった。

翌日の日中は各国の選手と一緒に水力発電所見学、地元のワイナリーで本場ワインのテイスティングをしたりして、リラックスした時間を過ごした。

こんなプログラムが組まれるのもこの大会の嬉しいところである。

夕方に表彰式が開催された。

優勝はスペイン、準優勝はチェコ、そして 3 位は地元のイタリアであった。

この大会が広く知られている欧州では、表彰台に上るのは大変な名誉であり、選手や関係者は抱き合い、皆本当に嬉しそうであった。取り分け開催国のイタリアはひとしおの喜びの様子であった。



日本チームは限られた現地情報、経験というハンデの中、チーム全員が健闘し、下位ではあったが数カ国には勝ることができた。

最後に大会を締めくくる晩餐会が開かれ、皆で楽しく食べて飲んで、釣りを語り各国の選手たちと夜遅くまで交流した。

2019 年の大会はオーストラリアのタスマニア島で開催され、湖中心に競うことになる。

今回の経験に更に磨きをかけ、できれば来年も参加したいと思っている。

この記事の読者の皆さんにも、WFFC に興味を持っていただければ幸いです。

夢のメーターオーバー

小松澤 誠一

春はコイ科の魚の産卵シーズンです。

私の住む茨城県の霞ヶ浦でも多くの魚がノソコミで岸に集まってきます。

一番数が多いのは皆さんご存知の「コイ」です。

多い時には岸際に数百匹の群れを見ることもできます。

次いで「フナ」が多いように思われますが、ごく稀に「ソウギョ」を見かけることがあります。

岸際に生えた葦の若芽や、木から落ちてくる葉っぱや花を悠々と捕食しているのです。

この「ソウギョ」が実にデカイ！

控えめに見ても 1 メートルを超えているものばかりです。

私は、時間の合間を見つけては霞ヶ浦に行き、ウェーディングによる立ち込みで釣りをしています。

霞ヶ浦の水は透明度が低いため、水深が 50cm 以上になると水中が殆ど見えません。

また、湖の周辺には葦が生えている場所が多く、一旦ウェーディングを始めてしまうと、次に陸に上られる場所が数百メートル以上先になってしまうという場所もあります。



そのため、霞ヶ浦に立ち込む場合には細心の注意が必要となります。

ライフジャケットの着用はもちろんですが、天気の変化にも気を使わなければ、楽しい釣りのはずが途端に恐怖の体験になりかねません。

特に注意が必要なのは「風」で、朝風の間に気持ち良く釣りをしていたら、日が高くなるにつれて風がだんだん強く吹き始め、波のうねりで思うように歩けなくなり、上陸できる場所まで戻るのに一苦労してしまうこともあるのです。

また、水の通りが悪い場所にも注意が必要で、そんな場所の底には大抵泥が溜まっています。

泥底は一旦ハマってしまうと抜け出すのが非常に困難なので、初めての場所では、タイヤチューブなどの浮き輪を持って入水する事をお勧めします。

私が霞ヶ浦でウェーディングを始めてから 5 年ほど経ちますが、巨大な「ソウギョ」は、年に 5 匹も目撃できれば多い方でしょう。

ウェーディングでの釣りでは、岸から 5～10 メートル程度沖に進み、岸に寄っている魚を岸沿いに攻めていく訳ですが、巨大な「ソウギョ」は 20 メートルくらい離れた場所からでも見つけることができます。

まるで鮫のように頭と背びれを水面から出し、岸際に生えた若草をのんびりと食べているのです。

捕食中の「ソウギョ」は警戒心が低いようで、静かに寄っていけば 7～8 メートルくらいまで近付くことができます。

普段は、「コイ」や「アメリカナマズ」を狙っているのですが、甲殻類に見立てたストリーマー系のフライを使っているのですが、「ソウギョ」を見つけた時は、葉っぱと間違えて食べてくれることを期待して、淡い緑色のウーリーバガーに付け替えます。

「ソウギョ」をサイトフィッシングするときには、「キャストの技術」、「魚の動きの予測」に加え、「忍耐」と「運」が必要です。

「ソウギョ」は口の中に餌が入っている最中は他の餌を食べないので、飲み込むのをじいっと待ちます。

食べ終わった後どちらに向かって泳ぐのかを良くお見極めます。

次に顔を出しそうな場所に、フライをそおっとキャストします。

ここでキャストに失敗すると、一瞬で見切られ、猛ダッシュで沖に逃げられてしまいます。

仮にキャストが上手くいったとしても、なかなかフライを食べてはくれません。

数年前に一度だけ、フライをくわえたように見えたことがありましたが、合わせを入れた途端に沖方向に猛ダッシュされ、20 メートルほど持っていかれたところで「ブツン」とあつけなく切られてしまいました。

魚を掛けた場所によっては、湖に沈んでいる障害物にラインがこすれ、勝負すらできない場合もよくあります。

その他にも 2 回ほどスレ掛かりで掛けた経験はありま

したが、短い格闘の末にばらしてしまい、なかなか手の中に収めることができませんでした。

ところが！

忘れもしない 2018 年 4 月 21 日 10 時 30 分頃！

とうとう念願のメーターオーバーを釣り上げることに成功したのです！

この日の天候は風も穏やかなうす曇りの釣り日和で、コイが至る所でノッコミに沸いていました。

いつもの通りノッコミのコイを釣っていると、進行方向に「例のモンスター」の姿が確認できました。

この日はいつもとはやり方を変えて、まずは岸際近くに回り、若くておいしそうな葉っぱを摘み取ることから始めました。

ご想像の通り、餌の準備です。

軽いフライに付け替え、フライフックに葉っぱを引っ掛けます。

葉っぱが外れないかを確認するために違う方向にキャストしてみますが、いい塩梅に外れません。

鼓動の高鳴りを抑えて緊張の一投です。

これが見事なパーフェクトキャスト！ 魚の進行方向 20cm ほど先の好位置に落ちました。

ゆらゆら進んでいた「モンスター」が、その葉っぱを何の疑いもなくパクリッ！

焦りながらも、「小さく」「鋭く」を心がけてフッキング！

慌てた「モンスター」が沖に向かって猛ダッシュを開始！！

これが止まらない！！

ラインは見る見る出ていき、ものの数秒でバックングラインまで引き出されています。

バックングラインが 20 メートルほど出されたところで、「もう出されまい」とラインを抑えるものの、勢いを止められずに指はヤケド。

冷静さを取り戻してリールのドラッグを調整し、ようやく勝負開始です。

リールのドラッグ性能の良さに改めて感謝！

この「モンスター」をかけた場所は、広く開けていて障害物がほとんどありませんでした。「運」にも恵まれたわけですね。

バックングを巻き取っては出され、また巻いてはまた出され、を 3～4 回繰り返すとようやく魚に疲れが見え始めてきました。

ここがチャンスとばかりにドラッグをもう少しだけ強めに締め、できるだけラインを多く巻き取り、ランディングできそうな砂浜にゆつくりと移動をしながら寄せます。

どんな魚も同じですが、降参して寄ってきたかと思いきや、釣り人の姿を見つけた途端に最後の猛ダッシュをくらわせて来ます。「コイ」や「ナマズ」で培った経験もあり、「そんなことは百も承知」と冷静に最後の攻撃を受け流し、最後の取り込みにかかります。

足元まで寄せてみて始めて気づきましたが、「本当に

大きい魚」は単純に「怖い！」

今まで、魚が怖いという感情を抱いた記憶はありませんでしたが、このときばかりは今まで感じたものとは異色の恐怖心を覚えました。

魚体の 1/3 くらいが水面に出るくらいまで浅瀬に寄せ、魚の沖側に入り「モンスター」を手で砂浜に押し上げたところで「完全勝利！」です。

20 分以上は格闘したでしょうか。
疲労と興奮で膝が震えていました。



お腹がパンパンに膨れた、見事に美しい「ソウギョ」です。

もしかすると、産卵直前の卵を抱えたメスだったのかもしれない。

使っていたロッドで魚の全長を測ってみると、竿尻から 2 番目のガイドまででした。

後で確認してみると、丁度 110cm でした。

重さはどれくらいあるかと持ち上げてみましたが、残念ながら私の力では持ち上げることができませんでした。

恐らく、20kg 近くあったのではないかと思います。

メーターオーバーを釣り上げるという経験はなかなかできるものではありません。

この魚との出会いで、釣り人としての一つの勲章を手に入れられたような気がします。

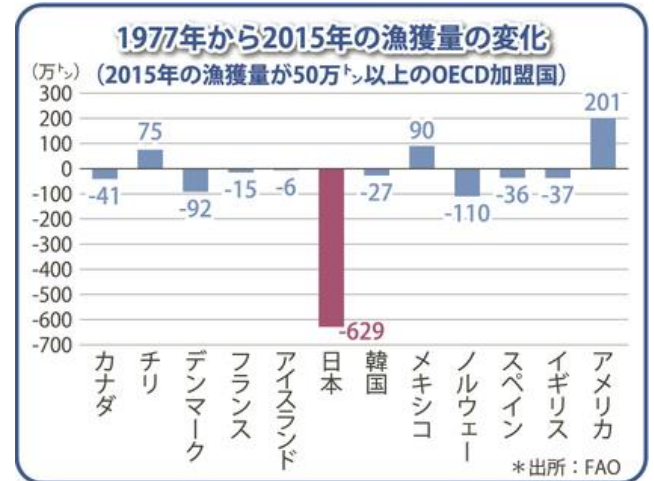
漁業法改正に思う 釣り人の覚悟の問題

石井 利明

この冬、70 年振りに「漁業法」が改正された。今回の改正の主眼は海面であり、漁業権制度を見直し、民間企業の新規参入を促すほか、乱獲防止のための資源管理が強化される。水産庁長官が YouTube 上で内容

を「「農林水産業・地域の活力創造プラン～水産業改革～」と題して説明している。

私の理解では、今回の改正の目的は漁業の形態を「育てる漁業」に変えて、企業の経営者を迎えて成長産業にしたいのだろう。



海面には漁業者がいるが、内水面(淡水)に漁業者がいる所は稀である。居るのは遊漁者(釣り人)なのだが、淡水の釣りも、同じ、漁業法によって管理される。いずれ、「育てる漁業」という変化は内水面にも及ぶだろう。

海面の場合は、漁業と言う職業が成立している。だから、市場があって、経営者がいるし、消費者も居る。他の産業と一緒に構造がある。しかし、内水面の場合は違う。魚を獲る漁業は、先ほど述べたように、殆ど消滅した。在るのは、楽しみにとして魚を釣る、「釣り」という産業が在るだけだ。この構造において、「育てる漁業」≡「育てる遊漁(釣り)」を実現することは、かなり難しい。「育てる釣り」ということ自体が、かなり矛盾している。釣り人以外なら、育てるなら「釣りなんかしなきゃいい」と考えることは自然だ。しかし、我が国の魚をめぐる自然環境は、“釣りを禁止すれば再生する”などという段階ではない。魚が棲む自然環境を壊すのは易しいが、再生するのは困難だ。そこには、かなりのヒト・モノ・カネが必要だ。

この負担を誰が担うのか。

魚に関心のない人たちが負担するとは考えられない。河川・湖沼は例外を除けば私有地ではないので、例えるのが正確ではないが、いいゴルフ場はゴルフメーカーが造るのではなく、運営会社と利用者が造る。

やっぱり、かなり矛盾しているが「育てる釣り」を担うのは、現状では内水面の漁場を管理しているのは漁業協同組合と釣り人たちしか居ない。漁協は職業として成立していないところが殆どなので、もっと言えば、利用者である釣り人の役割が重要だ。

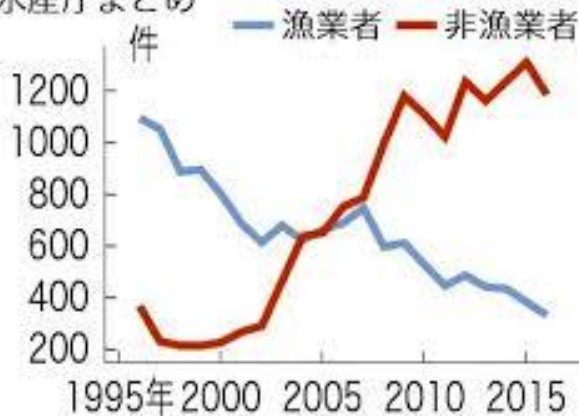
「育てる釣り」には釣り人の覚悟も求められる。具体的には、釣りを通じての費用負担や、ただ魚が釣れれば

良いという認識を変える必要がある。

しかし、釣り場で散乱したごみを目にすると、その道のりは険しい。自由に釣りをしたいという釣り人の要求は理解するが、ある程度の、釣り場のレベル分けは必要だと思う。

非漁業者の密漁が増えている

水産庁まとめ



「釣りの潮目」その3

四条 徳明

外へ出るのは危険とまでいわれた平成 30 年の暑い夏、家にいるしかなかったので、自宅にパソコンを入れた平成 9 年から 30 年までの約 20 年間 1000 回を超す記録を開き、その時々を思いだし楽しみました。

その記録の中から、釣り種別に、自分なりに釣り方を会得したと思っているものを総括してみました。

文中、文字に点線を振ってあるところが、その要の部分です。

マダイ

湾口・内房と相模湾で 114 回、うちマダイポーズ 46 回、サバ・ワカシ・イサキなどの外道も釣れない丸ポーズが 10 回ありました。釣友が好きなので私一人で行くことは殆んどありませんが回数は多かったです。

私達はボーズでも常連さんは釣っていることが多く、船頭指示のとおり(アミかオキアミを)コマセでも、入れ替えの時にエサが健全に付いていることも再三です。

常連さんの釣り座はミヨシ、柔らか目の長竿で 2 回ほど大きくコマセで竿掛けに置いて待つ人が多いようですが、色々聞いたりやってみても、結果は好転しません。

最近では秋の 3 連休中日に釣友と相談し、北風が強いので平塚でアマダイと思って行ったところ、釣り客で混雑しておりアマダイは満船、空きのあったマダイに乗りました。

前回と同じ船で片舷 10 人、釣り座は胴の間、オマツリを覚悟で平塚沖 45m 水深から始めてすぐ船中数枚上がったところで 1 時間ほどして二宮沖に移動。

90m 水深で内房船頭の指導を信じて 3 号ハリス 8m + 2m2 本鉤を底まで下ろして手早く 1m づつしゃくって指示棚で待つ。船中ボツボツ上がり小生も 2 枚上げ、雨の上がった 1 時ごろ小さな移動で 80m に移動したところで 32cm を上げ、すぐ大物をかけたので慎重にやり取りして 60cm。釣友もキロ級 2 枚。

アマダイ満員のおかげでいい釣りになりました。最近の自分として一番納得しました。

タチウオ

私が好きなので回数は一番多かったです。

釣行 168 回、釣果合計 934 本、ゼロ 23 回。タチウオはたまにサバが来ることがありますが殆んど外道なしです。

釣期は、初夏、湾東浅場のルアー釣りから始まり、秋から猿島から観音灯台東沖のエサ釣りで 1 月末まで、川崎、八景、新安浦など湾口の船に行きました。

ルアーは 10 年くらい前からはやり始め、最近では八景はルアー、新安浦はエサが多く、ルアーに 3 回ほど行きましたが自分の釣りではないと思い、以後殆んどエサ釣りです。

八景でタチウオ船に乗る際は、船頭がオマツリしないようエサ釣り客をミヨシに並べてくれますが、釣果はルアーとあまり違いません。

エサ釣りが好きなのはルアーと違い、底近くから 20m ほどまで 1m づつゆっくり誘いあげて来たとき、小さなあたりを逃さないこと、それを送りこむか？ 待つて喰わせるか？ ゆっくり誘いあげ続けるか？ 1 尾 1 尾で喰わせるタイミングの違う面白さがあります。

最近ではあたりが出たらそこで竿先を止め、心の中で「君が代」を唄い、1 節ごとに 1 回リールを巻き上げ、竿先が引き込んだり重くなったりしたら竿先を早めに立て合わせる。

4 節終わっても、何か触っているようだったら続ける。変化がなければ「…苔の蒸すまで」で竿を立て巻き上げエサを確認する。このリズムで食い逃げが少なくなり竿頭になったことも。

ハナダイ

よく行くのが片貝、飯岡、外川ですが、釣友がヒラメが好きなので、現地ではいつもハナダイとヒラメで別々に乗りました。

釣行回数 83 回、エサは外川で活きエビの胴突き、片貝ではコマセのウイリーとオキアミでしたが、外川では 3 年ほど前に船頭が自分で用意する活きエビ取りが外川漁協で禁止になり、食用の数 cm 冷凍エビを切って使うようになってから、釣果がドンと下がったので、飯岡、片貝が多くなりました。

12 月に入ると、正月用の赤い魚が欲しくなり、マダイはボーズ覚悟ですが、ハナダイなら掌サイズが中心で、30cm も混じって 30~40 は普通なので毎週行っていました。

エビハナダイは、ハリス 4 号 40cm3 本鉤の仕掛けで、

活きエビを尾から刺し、40m ほどの底まで一気に落とし、真下まで 2・3 回糸ふけをとっているうちに、短かく鋭い当たりがくる。多くはそれがきたときはエサがない。来たかなという感じがあったら強く合わせてみる。 鈎掛かりしていたら、そのままの位置で数秒様子を見て、追い食いしたら一度強く合わせて巻き上げる。

近頃は、柔らかい長竿でゆっくり待つ人も多くなりましたが、短尺の先調子であたりを合わせるのが私の楽しみです。

コマセハナダイは飯岡・片貝で、アミコマセと 3 本鈎にオキアミエサで底から数 m、セッセとコマセで当たらなければ 1 回ごとにコマセの入れ替え。外房のタイ五目や相模湾のウイリー五目などと同じです。

要は如何にコマセるかですが、コマセ方は内房船頭に教えられたビシを底 1m から指示棚の上 1m まで 1m づつコマセて、毎回詰め替えるを守っています。

マアジ

釣りは深場(27回)と浅場(97回)、時間を持て余し遊び半分の時や、近所の方から中・小学生の子ども連れをせがまれたときは、午後からの半日船。仕掛けは、どこの港も殆んど市販の同じものですね。

土日など客が多いときの釣り座は、胴の間の子ども連れの子どもの側にする。子どもの面倒を見切れない親のときには出しゃばらない程度に手を出したり、3 時間の沖上がりまで持たない子や、船酔いする子もあって、後半は自分の釣り座が広がるなどの利点もあることが多いからです。

イシモチ

マアジと同様で、ヒマな時にブラブラ釣りでもするかという時に(39 回)行っています。柔らかい竿先を引き込んだら上げるという単純な釣りなので、初心者や近所の子を連れに頼まれた際によくいきました。

エサのイソメを 1 匹丸付けするので、これが意外と手間がかかります。そこで、蒲鉾板に彫刻刀で数本のミズを掘ったのを作り、木綿のウエスを敷いて真ん中に置き、エサ箱の中で団子状態になったのを 2、3 匹ほどいて乗せておくと、溝の中に 1 匹づつ並ぶので、頭側を左手でチョット抑えながら右手の鈎を頭の固い所を外したところに刺すと、尻尾をからげてくる前にエサ付けが済むので簡単でした。

このほか

仕事で各地の沿岸に出張する機会が多く、大抵夕方の宴会が付いていましたが、私はお酒を呑むより翌朝早く釣りに行きたいと言って手配を頼みました。

オホーツクのカレイ釣り、銚子のサバはね釣り、小笠原でオキサワラ引き縄釣り、済州島のインダイ磯釣り、南氷洋でサメを釣ったなど、一般ではなかなか経験できない釣りもあり、40 歳台からは年 50 回を計画し実行してきました。

前号・前々号に、社会に出てから長い間親しかった釣友が、亡くなる前に釣りの哲学的な話を冥土への手土産話に持たせたことを「釣りの潮目」として載せていただきましたが、それから 1 年の間に、自分も大きな潮目に遭遇し、新しい年号が決まらないまま、平成 31 年(2019)を迎えました。

昨平成 30 年の日本は、記録的酷暑、地震・洪水・崖崩れなど自然災害に、ブラックアウト、日産ゴーン氏の逮捕など人災も多発し、自分も車庫入れの時、アクセル踏み違いでうしろを大破したため 60 年も生活してきた車生活に終止符を打たされ、更に4月には自宅庭で転んで左膝お皿を割って二か月ギブス、リハビリが日課の日々で年を越し、最近やっと不自由な頭と体で環境に逆らわない生活をすることに馴れてきたところです。

これからは、要支援 2 の歳相応に、静かに過ごすつもりです。

JOFI 設立以来、永い間お付き合いいただいた会員諸兄が、これからも益々のご健康と釣りの技術、楽しさの普及に尽くされることをお祈りいたします。

2018 年度活動実績

日付	活動実績
4/8(日)	秋山地区豊かな川づくり (ヤマメ釣り指導、エサ、フライ、テンカラ)
5/20(日)	親子マス釣り懇親会 (マス釣り & BBQ)
7/21(土)	若洲シーサイドパークグループ・(公財)日釣振東京都支部主催 第 12 回若洲海浜公園親子釣り教室 (釣り指導サポート)
8/19(日)	全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参 (釣り指導サポート)
8/26(日)	第 6 回アウトドアフィッシングスクール in 若洲 (安全な釣り指導・魚の捌き方サポート etc.)
10/13(土)	若洲シーサイドパークグループ・(公財)日釣振東京都支部主催 第 3 回「初心者・ファミリー釣り教室」 (釣り指導サポート)
11/3(土)	ふるさと清掃運動会実行委員会主催ちょっといいこと「荒川でゴミ拾い」 (協力参加、及び模擬釣り教室 etc.)

日付	活動実績
11/10(土)	ヤマメ発眼卵埋設&稚魚放流 (JOFI 西東京の事業へ協力参加)
11/17～11/18 (土・日)	30 年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 (スタッフ・講師を派遣)
1/18～1/20 (金・土・日)	ジャパンフィッシングショウ 2019 (JOFI 神奈川の事業へ協力参加、ニジマス釣り等のサポート)
1/19(土)	釣りインストラクター・マスター研修会
毎月第 2 土曜日	若洲海浜公園釣り場における釣り場クリーンアップ、及び釣り指導
9/16・17 (日・月) 9/23・24 (日・月) 11/23・24・25 (金・土・日)	キッズお仕事体験 (釣りインストラクターの紹介、模擬釣り体験、魚に対するホットな話題提供)

編集後記

今回の会報は特に特集を組んだ訳ではなく、それぞれの執筆者が選んだ自由なテーマで寄稿をお願いしました。

釣り場を取り巻く環境とその保全活動、釣り報告、法律の改正などなどの多岐にわたった情報となっております。

執筆者の皆様には会報発行にご協力頂き、誠に有難うございました。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て、適宜特集を組んで発行していきたいと思います。

原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛に e メールや郵送などでお寄せ下さい。

現行の集まり具合によっては期限を設けて執筆依頼をすることもありますので、その際はご協力お願いします。(広報部)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌 第7号

発効日 2019(平成 31)年 1 月 11 日

発行 JOFI 東京
(一社)全日本釣り団体協議会 公認
東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上(広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>